

テーマ:日本のこころ・地球のいのち

高さ47mの大地の塔は博覧会場のランドマークとしてそびえていた。威圧的なパビリオンだと思っていたが実際に目にするとその印象は一変した。

まず、巨大な壁面から流れ落ちる水のパフォーマンスである。

凹凸のある塔の外壁を水が様々な模様を描き落ちていく。水の勢いは一定ではなく時間帯によって変化する。流れ落ちる水音は心地良く響き、水辺に佇んでいるような気分させた。

列が進むとどこからか木琴のリズムが聞こえてきた。風力で動く高さ8mの音具である。とても優しい音色で風の動きを感じる仕掛けだ。

塔周辺は、流れ落ちる水で子どもが遊び、風が吹くと木琴がリズムを奏でる。その情景はまるでずっと前からそこにあるように自然だった。

長い列を進み、いよいよ塔の内部へ入ると世界最大の万華鏡が頭上にあった。その存在は圧巻で、刻々と変化する光の表情にしばらくの間見惚れ、南の島で見た流星群を思い起こしていた。周りを見ると皆が上を見上げ言葉数が少なくなっていた。

人工の空間であるが、その周辺や内部で行われる行為は自然の中にいるような、時を忘れさせる仕掛けがたくさんのパビリオンだった。(神林)

